

最後のメール

筒井 友弥

2020年3月末に退職された吉田光演先生の最終講義が、新型コロナウイルス感染症蔓延のため中止となった。当時、ほかにも多くの会やイベントが取りやめとなつたが、これほどコロナに腹立たしく感じたことはあつただろうか。26年と半年という長きにわたり広島大学で教鞭を執られ、膨大な研究業績を残されるとともに、学内外の公務に多大に尽力された先生の最終講義である。門下生の一人として、先生の最後の講義に預かることができないというのはとても悔しい思いであった。しかし、その翌年の6月20日に吉田先生から一通のメールが届く。大学院人間社会科学研究科の大嶋先生のご尽力で、2021年7月7日に、最終講義の代替として「特別講義」が開催されること。先生のメールには、『大嶋広美先生のご厚情に甘えて、個人史も交えた研究生活を回顧してみようと思い立った』と書かれていた。そしてまさに、この特別講義を通して、院生として7年、その後も公私にわたり16年先生にお世話いただいた私が、それでもまったく知り得なかつた先生の年譜を拝聴することができた。私にとって、とても潤沢で、なにより新鮮で、驚きにも満ちた貴重な講義であった。遠方者も参加できるようにハイブリッド形式で開催されたことを思うと、今やレコードティングされていればと悔やむばかりである。

そう、この特別講義がまるで昨日のことのよう。先生の朗らかな表情が、目を細めて満面にたたえられたいつもの笑顔が、まるで古い映写機のように、カシャッ、カシャッと何度も映し出される。講義からちょうど1ヶ月後の8月7日。先生のメールにはこう綴られていた。『今はまだ完全に秘密だが、部分的転移も進み、遂に点滴による抗がん剤治療を受け始めた』。正直、最初は何ひとつピンと来なかつた。現実感の欠片もなく、まるで自分とはつながりのない人がまったく関係のない話をしているような感覚だった。脳が冷静に理解することを避け、ただ、みぞおちの上のあたりが、見えない何かでぐっと押さえつけられた。ドクドクドクッと、息苦しかつた。

先生は、その後も門下生数人に対して何通ものメールを送られ、入院や治療内容、副作用に関する具体的な状況を伝えてくださつた。極度の副作用こそないものの、終始節々の鈍痛、疲労、腰の痛みを訴えられ、特に腰痛についてはひどく悩んでおられた。そのような心身とともにご自身が最もお辛い最中に、それでも先生は、我々に心配をかけさせないようにと「大丈夫」を繰り返された。少なくとも私宛の当時のメールをすべて確認してみたが、「痛い」という表現はいくつか見られたものの、どこにも、ひと言も「辛い」とは書かれていなかつた。それどころか、8月12日のメールにはこう記されている。『極度に心配をかけてしまい申し訳ない。今のところ普通の年金生活を過ごしている。「広島ドイツ文学34号」の論文締め切りが月末に控えているが、発表を敷衍すればよいので何とかなるだろう。同号に寄稿する

「エッセイ」はとっくにできている。乞うお楽しみ』。

先生が「発表」と書かれているのは、同年5月15日に開かれた広島独文学会での発表のことであり、これは、その後10月に開催された東北学会でのシンポジウムに向けて行われたものであった。このシンポジウムは、東京外大の藤繩康弘先生が獲得された科研費の一環で、吉田先生とともに私も分担者に加えていた。あえて当然のことを記すが、学術活動における吉田先生は常に「プロフェッショナル」であった。私が博士課程生のとき、先生は40代後半から50代半ばであり、この年齢も相まって、まさに学内外、国内外において、あらゆるプロジェクトや研究・教育活動に携わっておられた。各所で「○○長」と名のつく多くの職を兼任されながら、論文や書籍の執筆、研究発表や講演会を怒濤の勢いでこなされていた。後に、曲がりなりにも一大学教員の職に就いた者として、先生の当時の仕事ぶりがいかに超人的であるか、今、身をもってひしひしと感じている。こうした先生の職人気質は、お身体を崩されてなお何も変わりなく、療養中などとは1ミリも感じさせず、シンポジウムでの発表を万全にこなされ、翌年に提出の叢書も滞りなく執筆され、同時に、機関誌の編集委員として何本もの論文を査読され、平行して、集中講義から市民講座まで徹底してドイツ語の教育にも従事されていた。「広島ドイツ文学34号」に、論文とあわせて寄稿された至極のエッセイもこの頃に書かれたものである。あまりに大変な日々であられたに違いない。ただ、そのエッセイに綴られた先生の一字一句を目にするとたび、それでも私のなかで先生は、「こんなの大したことないぞ」と朗らかに微笑んでおられる。

2022年は、科研費の関係で藤繩先生とのメールのやりとりを、また、私も委員であったことから学会の機関誌編集のやりとりをCCで拝読しながら、間接的にではあったが、先生の元気な「おことば」を頻繁に目にすることことができた。ご病気であることなど微塵も感じさせないような、卓越的で完璧なお仕事ぶりであった。そのため、事もあろうに私は、まったく先生のお身体を気遣うこともせず、まるで院生時代さながらに、ドイツ語に関する多くの質問をメールで投げかけた。そして、その度に先生は、当時の指導さながらに、私が理解するまで何度も、迅速かつ懇切丁寧なご返答をくださった。先生がこの年のLinguisten-Seminar（日本独文学会語学ゼミナール）に参加されなかったことに、軽はずみにも私は「残念です」などとメールを送ると、『今回は体調が良くなくて申し込みを控えた。ステロイドの影響で腰痛と背中の痛みがひどく、脊椎圧迫骨折が数カ所見つかった』と返信してきた。9月2日、先生のお誕生日でのメールである。先生はご病気だったんだ。どこかで認めようとしたが、認めたくなかった現実が、みぞおちの上のあたりに重く压しかかった。ドクドクドクッ。その三日後に、広島大学でLS招待講師による講演があり、オンラインでの特別講義以来1年以上ぶりに、先生のお顔を拝見する機会があった。終始背中と腰の痛みに耐えられながら、それでも講演の質疑応答では核心を突いた指摘を連発されていた。そんな先生に畏敬の念を抱きつつ、斜め後ろに座した私は、至って痩せられた先生の背中を見つめていた。

2023年1月7日。年が明けて先生からの最初のメールには、『腰痛が続いているため時々横になるが、筋力が弱らないよう時々歩いてもいる。研究はぼちぼち続けたいと思っている。みんなもいろいろ大変だろうが、がんばってくれ』と書かれていた。「がんばれ」。これまで星の数ほど見聞きしてきたことばが、このときほど胸に突き刺さることがあつただろうか。同年9月23日に、第106回広島独文学会研究発表会が開かれ、コロナ禍以降2年ぶりに対面で発表させていただく機会を得た。先生に再会できると楽しみにしていたが、先生から会の前日に、『残念だが、別用のため参加できない。可能なら発表の資料を送って欲しい』との連絡をいただいた。馬鹿の一つ覚えよろしく、おこぼに甘えてさっそくハンドアウトをメールで送ると、その3時間後の深夜に、2000字、原稿用紙5枚分におよぶご指摘とご助言をいただいた。実は、このときの発表内容には、発表者本人が自覚し切っていたある致命的な問題点があったのだが、当然ながら、2000字のなかでそのことが鋭く射抜かれていた。ハンドアウトのみにもかかわらずあまりに的確なご指摘であったため、もはや恐しくて笑いが込み上げた。自宅で一人にやにやしながら、先生の教え子であったことを本当に嬉しく、心から誇らしく思えた。10月11日、先生から『先日の広独は参加できず申し訳ない。実は、広独と同じ時間帯にイタリアのイムジチ合奏団のコンサートがあり、妻とそちらに行っていたのだが、広独のことを思うと schlechtes Gewissen だ』というメールが届いた。私は、やはり自宅でやにやしながら、先生がその選択をされたことこそ本当に嬉しく、それでも、そのことに良心の呵責を抱かれる先生が、不遜にも心から愛らしく思えた。

3日後の10月14日。京都府立大学で全国学会が開催された。私は、実行委員の庶務としてあたふたてしまい、なかなか先生との時間が持てなかつたのだが、幸いにも、懇親会ではゆっくりお話をできた。当然少量とはいえ、それでも先生がお酒を飲まれていることに不謹慎にも安堵感を覚え、認めようとしなかつた、認めたくなかった現実から目を背けた。そして、このときの再会が最後となつた。翌年2024年の2月28日に、大嶋先生から「吉田先生が入院中である」とのご連絡をいただいたとき、私はなぜか、お見舞いに行くべきではないと確信した。ご病気が発覚して以来3年以上にわたり、先生は門下生たちに、そして私個人にも、常にメールでメッセージを送られ続けた。具体的な症状や治療法、通院の期間、その際の医者との会話内容まで。そうすることで「だからこそ心配無用」と伝えてくださっていた。しかし、今回の入院に限つては一切のメールはなかつた。大嶋先生も、奥様からのお電話を受けたフランス語の先生からのご連絡でお知りになつたほどである。つまりは、その『無言のメール』が、先生からのメッセージだと思った。そうして、私のなかの先生は、いつも目を細めて満面に笑つておられる。

特別講義で先生は、「昔は漫画家になりたかった」と語つておられた。いつかのお酒の席では、「小説家を目指していた」とも話されていた。クラシック音楽に精通されていたことから、ご退職後はバイオリンに挑戦されていたとも聞いている。いや、挑戦どころか、確かに演奏会を開かれていたかと。七夕に開催された特別講義の翌日、先生からのメールには、

『コロナ禍が過ぎ去ったら、一度お疲れさん会でもやりたい』と書かれている。『はい、ぜひ会を開きましょう。バイオリン演奏を拝聴しながら、ゆっくり先生の作品を鑑賞させてください。ただ、恐縮ですが、先生はあまりに急いで走り続けられたように思います。ですので、今は少しだけお休みください。またお会いできる日を楽しみに。筒井』。

付記

ここで綴り切れない吉田先生への感謝の想いは、拙文ではありますが、『ラテルネ』（同学社）に認めました。追悼文執筆の機会をいただきました同学社に、この場をお借りして御礼申し上げます。